

「HTTP collection3」

「でてこない」・・・2Pㄱ

「抽象劇?」・・・8Pㄱ

「タイムリープ対決」・・・16Pㄱ

「どろいなる」

【登場人物】

茶／荒原

白／斉藤

黒／山田

黒2／國分

演出（古澤）

舞台には乱雑に白箱が4つ。茶、白、黒が出ている。
明転。

茶「僕は薄く、爽やかな存在だ。僕は知りたい。僕は…僕だろうか？（たどたどしくなっていく）僕は、この、あの、その、狭い！世界で！個性があるの？」

白「ああ……………」

黒「黒…泡…黒い闇…黒いグミ…真っ黒なグミ…食べたくない」

茶「僕は知りたい。僕は…必要なのか？（たどたどしくなっていく）僕は、この…この、この、狭い、世界で…どう思います？」

白「ああ……………」

黒2が下手から恐る恐る出てくるが←の黒の台詞が入り、慌ててはける。

黒「闇…泡…ビワ…琵琶湖…滋賀県…ひこにゃん、はこの県だっけ？」

茶「そうさ！僕は求められるんだ！でもさ、僕は違う。（たどたどしくなっていく）ならば…知りたい、誰が一番…ね？必要と、ね？されるのか？…つつてよ」

黒2が下手から恐る恐る出てくるが←の黒の台詞が入り、舞台を見渡した後、スツとはける。

黒「闇…光は…無い…けど…甘えたい時も…ある…オカンと…ボクと時々オトンと東京タワー」

白「ああ……………」

茶「そうさ、僕は、決して、相容れること、とかは、できない。けれどそれが…それが…それがあの…（後ろから台本を取り出して読み、また後ろに隠す）僕達の個性！」

演出「はい！やめー！ー！！」

演出が上手から出てくる。下手から黒2も出てくる。

演出「いやもう無理よ。もう許容できないよ。流石に台本出して読まれたら一旦中断だよ！」

茶「古澤さん…ばれました？」

演出「ばればれたよ。そもそもズーっと台詞がたどたどしいんだよ。ふわふわしやがって！」

茶「すいません、演出」

演出「分かってんのか荒原？後1週間後に俺達劇団三角組の舞台本番が迫ってんだぞ？なのに全然台詞入ってねえじゃねえかよ！」

黒「まあまあ演出。彼も反省しているようですし、その辺にしましょうよ」

演出「まあな…じゃねーよ山田。いやお前も！お前は確かに抽象的な単語を喋るキャラだけ
ど…後半がテキストーなんだよ！お前なんて言ってた？グミとか時々オトンとか、ひ
こにゃんとか！」

黒「しかし演出、ひこにゃんは滋賀県のゆるキャラでしたっけ？」

演出「いや何の話？滋賀県のキャラだけど。じゃなくて、ちゃんと台詞を言えっつての！雰囲気
気だけ出してても誤魔化せないからね？東京タワーってなんだよ！」

黒2、スツと下手へはける。演出、それを逃さない。

演出「いやいやいや…スツといなくなろうとすんじゃないよ！國分」

黒2「しかし演出、私は台詞のミスはしていませんよ？」

演出「いやお前に関しては台詞以前の問題だから。出るタイミング間違え過ぎだから。自分
の出るタイミングくらいしっかり覚えて！」

白「お前らさ、もつとしっかりしようぜ。自分の台詞に誇り持とうぜ」

茶「いや『ああ』しか言っていないやつに言われたくないわ！」

白『『ああ』も立派な台詞だ。俺はこの『ああ』に全力をかける。演出からもらった、大
切な台詞だからな」

演出「いやお前の台詞『ああ』だけで終わりじゃねえから！斉藤！その後もちゃんと長めの
台詞あるから！」

白「…ああ」

演出「ああじゃねえよ。なんだお前」

黒、白、黒2の3人、茶に集まって台本を確認している。

演出「あのお前ら…今回は俺達のライバル、劇団クロサワもこれと同じ台本をやるってこ
の前教えただろ？このままじゃああいつらに負けちゃうぞ！？それでも良いの
か！？」

茶「演出、我々は他と競うのではなく、来てくれたお客さんに楽しんでもらえれば、それ
で満足です」

演出「急に言うこと立派！良い志だけど！いやそれだったら尚更ちゃんと台詞覚えろよ！」

茶「はい、もう大丈夫です。今きちんと確認できました。もう完璧です」

他の3人も頷く。

茶「もう絶対舞台上で台本もカンペも見ません」

他の3人も頷く。

茶「信じてください」

他の3人も頷く。

演出「…分かった。よし！じゃあさっきの…山田のところから最後まで、やってみろ！」
4人「はい！」

茶・黒・白、先ほどの位置取りになる。演出、舞台上手端に寄る。黒2、舞台に出ているがまだ出るところではないと気づき、スツと下手へはける。

黒「闇…光は…無い…けれど泡…（少したどたどしくなる）はじけ…冷たい…甘い泡…求められる…私は（ドヤ顔で正面を向く）」

演出「よし！セーフ！」

白「ああ…：…分かるとも。しかし俺も持つ。冷たく、甘い。さらに白、俺は誠実の白（ドヤ顔で正面を向く）」

演出「セーフ！」

茶「そうさ、僕達は決して相容れることはできないのさ。けれどそれが…（たどたどしくなっていく）僕達の、個性。僕という…存在だけを…（懐に手を入れるが踏みとどまる）欲してくれる！ああ！なんて嬉しいんだ！」

演出「セーフ！ヒヤヒヤさせるぜ！」

黒2「本当に…」

黒2、下手から現れる。

間。

黒2「（後ろから台本を取り出して読み、また後ろに隠す）そうかな？」

演出「いやお前が読むんかい！最初の台詞くらいちゃんと覚えろ！」

茶「なぜ…あなたがここに…？僕達とは根本が…（台本を取り出す）違うあなたが！？」

演出「結局お前も読むんかい！」

黒2「そんなことはない。私も闇だ。その者と同じく…」

茶と黒2、同時に台本を取り出す。

黒2 「真っ黒な闇だ（台本を隠す）」

茶 「色の問題ではない！（台本を隠す）」

演出 「2人同時に読むんじゃない！」

白 「ああ！……ああ！」

演出 「力強い相槌2回！きちんと台詞を言ってくれ！」

黒 「熱、冷：冷房、暖房：東京タワー」

演出 「出た！東京タワー！前後の繋がり関係なく！」

白と黒、茶と黒2に近づき台本を読もうとする。

演出 「台本を求めにいくな！」

黒2 「彼らは理解する……」

茶と黒2、同時に台本を取り出す。しかし演出が2つの台本を取り上げる。

黒2 「たどたどしく」 遠い、あの、記憶が蘇る、か……？」

茶 「たどたどしく」 1つに……なる、つってよ」

黒2 「たどたどしく」 そう、混ざり、合う？……つってよ」

演出 「そんなに出なくなる！？」

茶 「馬鹿、な？そんなの、起こらない……あなたと（白箱のフタをとるとカンペが貼ってある） 僕と彼らが……相容れることは無い！決して！」

演出 「そんなところにカンペを！？用意周到か！」

黒2 「キミは、世界か？違う、な……（白箱のフタをとるとカンペが貼ってある）キミは世界ではない。世界は自由だ」

白 「（白箱のフタをとるとカンペが貼ってある） ああ。分かるとも。なんて世界だ」

黒 「（白箱のフタをとるとカンペが貼ってある） 黒……闇……全ては黒になる」

演出 「順序良くカンペを読んでいくんじゃないよ！何？打ち合わせ済みなの？」

演出、全てのフタを没収する。

茶 「ふざけるな！」

演出 「こっちの台詞だよ！」

茶 「僕は僕なのだ！何があっても1つで存在する！」

演出 「ごめん！今のはそういう台詞だったね！」

黒2 「もう無理だ。我々はゆっくり……ゆっくりゆっくりゆっくり……うん」

4人、顔を見合わせ頷いた後、最後の位置取りになる。

黒2 「世界は残酷！これが答えだ！」

演出 「その台詞最後のところ！途中すっ飛ばして終わらせにきた！」

茶 「そうか…分かった気がする」

白 「消えていく俺…」

黒 「新しい私…」

黒2 「これは、運命（さだめ）」

4人 「そう、これは悲劇ではない…喜劇なのだ（全員合わない）」

演出 「全然合ってねえな！最後の最後の台詞だぞ！普通忘れないだろう！！…お前ら結局全

然駄目だな！本番でも台本持ってやるか！？えええ！？そんな舞台観たことねえけど
な！」

茶 「あ、でも1つだけありますよ」

演出 「はあ？」

茶 「朗読劇です。もう我々の公演、朗読劇にしましょうよ」

演出 「………天才か」

暗転。

【終】

「抽象劇？」

【登場人物】

茶

白

黒

黒₂

劇団クロサワ演出

助演出（鈴木）

台本作者（坂部）

舞台はどこか閉ざされた世界。4つの白箱が置かれている。茶、白、黒が出ている。

明転。

茶「僕は薄く、爽やかな存在だ。僕は知りたいたい。僕は…僕だろうか？僕は、この狭く閉ざされた世界で…異なっているのか。個性を持つているのだろうか」

白「ああ。分かるとも。しかし確かに違う。俺とお前。俺は白、深い白」

黒「黒…泡…黒い闇…泡…闇…それが…私」

茶「僕は知りたい。僕は…必要なのか？僕は、この狭く閉ざされた世界で…求められているのだろうか？」

白「ああ。分かるとも。しかし俺は感じる。この場所で、求められていると」

黒「闇…泡…また泡…闇…止まらない泡…求められる…私は」

茶「そうさ、僕達は求められるんだ。でもさ、僕達は違う。違うのであれば知りたいたいだ。誰が一番…必要とされるのか？この狭く閉ざされた世界で…誰が最も求められているのだろうか？」

黒「闇…光は…無い…けれど泡…はじけ…冷たい…甘い泡…求められる…私は」

白「ああ。分かるとも。しかし俺も持つ。冷たく、甘い。さらに白、俺は誠実の白」

茶「そうさ、僕達は決して相容れることはできないのさ。けれどそれが僕達の個性。僕という他とは違う存在だけを欲してくれる。ああ、なんて嬉しいんだ」

黒2「本当にそうかな？」

、黒2、下手から現れる。

茶「なぜ…あなたがここにいて…僕達とは根本が違うあなたが！？」

黒2「そんなことはない。私も闇だ。その者と同じく、真つ黒な闇だ」

茶「色の問題ではない！ここにいて…世界が許すはずがない！」

白「ああ！分かるとも！しかし！考えたくない！分かりたくもない！」

黒「熱…冷…抗えない…1つになる…運命」

黒2「彼らは理解する。遠い記憶が蘇るか」

茶「1つに…なる？」

黒2「そう混ざり合う。私はそのためにここへ来た」

茶「馬鹿な！この場所で起こる訳がない！あなたと僕と彼らが…相容れることは無い！決して！」

黒2「キミは世界か？違うな。キミは世界ではない。そして知らないのだ。世界を。世界は、自由だ」

白「ああ。分かるとも。しかしお前が来るとは。なんて世界だ」

黒「黒…闇…その先も闇…全ては黒になる」

茶「ふざけるな！僕は僕なのだ！何があっても1つで存在する！」

黒2「もう無理だ。我々はゆっくりと溶け合い、混ざり合う。何も怖がることはない。私は知っている」

茶「嫌だ：自分を、僕を、失いたくない！」

黒2「嘆いたところで、変わりはない」

黒「混ざり合い…消える…存在…やってくる…絶望」

茶「僕は知りたい。僕は…何者になる？僕の知らない、あの世界で…僕は何者になるのだろうか、と」

白「ああ。分かるとも。しかし、俺は本当に何者かになれるのか？消えてしまうのではないか？俺は…残りたい…！」

黒「1つの結果が生まれるだけだ。そしてそれは今に始まったことではない。何千、何万と、そしてまた未来にて繰り返されること」

黒「冷たい…熱い…溶け合い…消える…泡」

茶「ならば…お願いだ…どうかこんな僕を、もう僕と言って良いのかも分からない」

白「分かるとも」

茶「受け入れてほしい。だって世界が、あなたが望んだのだろうか？」

黒2「世界は残酷。これが答えだ」

茶「そうか…分かった気がする」

白「消えていく俺…」

黒「新しい私…」

黒2「これは、運命（さだめ）」

4人「そう、これは悲劇ではない…喜劇なのだ」

4人、お辞儀をして後ろに整列する。上手から劇団クロサワの演出（以下、ク演出）と助演出が出てくる。

ク演出「うむ、仕上がってきたな」

助演出「へい！素晴らしい出来になってきやしたね！流石は劇団クロサワの名演出！」

ク演出「うむ。これで坂部殿との対談も心置きなく行えるな」

助演出「へい！この台本の作者様ですね！」

ク演出「ああ。因みに鈴木よ。私が演出した今の稽古を見て、助演出であるお前の感想を言ってみろ」

助演出「へい！自分は今のを見て、役者さんの声が大きくてすごいと思いやした！」

ク演出「いやなんだその感想！小学生か！お前もなりたてとはいえ助演出なのだから、そういう意味では少しは表現から何かを汲み取ってみろ」

助演出「へい！勉強になりやす！」

ク演出「私は台本から作者がこの世に伝えたいことを汲み取っている。この作品は、人間の心の奥深さを表現しているのだ。そういった意味では、彼ら4人は人間の心、異なる自我を表していると言える。この意図が分かるか？」

助演出「へい！つまり…彼ら4人は人間の心、異なる自我を表している、ってことでやすね！」

ク演出「…うん？まあ…それでだ、最初の3人の話し合い、個性とは勿論自我のこと。人の心は1つではない。白の自分も居れば黒も居る。そういった意味では、この作品は最初からすでに深い意味を持つ。これが分かるか？」

助演出「へい！つまり…この作品は最初からすでに深い意味を持つ、ってことでやすね！」
ク演出「うん？まあ、そして次の会話。どの自我が本当の自分なのか。それを『求められる』といった言葉で表現している。そういった意味では、決して誰が一番人気かを競い合っている訳ではないのだ。分かるか？」

助演出「つまり…決して誰が一番人気かを競い合っている訳ではない、ってことでやすね！」
ク演出「いやさつきから私の言葉を繰り返しているだけではないか！少しは自分で考え、分かったことを言ってみろ」

助演出「へい！…演出殿はよく『そういった意味では』って言葉を使いやすよね？」
ク演出「どうでもいいわそのこと！ちゃんと考えろ！そしてそこに、自分でも予想していない自我が現れる。そういった意味ではまさに異質。その自我と相容れることは決してできないと。しかし外の世界、そういった意味では自我を持つ人間、彼は新しい自我を形成しようとしている。そもそも今ある自我も異なる自我と自我が混ざり合い生まれた自我だとも言える。そういった意味ではな。分かるか？」

助演出「へい！今演出殿はそういった意味ではって3回言ってやした！」
ク演出「だからどうでもいいわそれは！まったく…せめて最後くらいは暗記する勢いでちゃんと聞け！」

助演出「へい！」
ク演出「混ざり合うことは今ある自我が消えてしまうことも意味する。しかし新しい自我の形成は、新しい自分が生まれる喜ばしいこと。そう、悲劇ではない、喜劇なのだ、と」

助演出「おお！あのラストにそんな意図が！流石演出殿！しっかり作者様と心を通わせてやすね！」
ク演出「うむ…うむ」

作者、上手から出てくる。

作者「先ほどの稽古、あちらで拝見させてもらったよ」

ク演出「これは作者様。如何でしたかな？」

作者「まさか私の台本をどのように演出してくださるとは…恐れ入った」

ク演出「ありがとうございます。私の演出を評価して頂けたのならば、坂部さん、あなたと心が見事重なり合えたのでしよう。私は自慢ではないですが、作者が作品に意図することを読み取れる演出家なのです」

作者「なるほど、素晴らしい。あなたは私の伝えたかったことを理解できているとみた」

ク演出「勿論です。まずは最初の3人の会話。あそこには冒頭から深い意味が、」

作者「ええ。最初の会話、あそこには別に深い意味はあんまりないところですか」

間

ク演出「深い意味は、ないところですよー」

助演出「え？」

ク演出「あの最初の会話にはね、絶対深い意味はないと思ってましたよー」

助演出「あれ？演出殿？そうでやしたっけ？」

ク演出「え？何々？私そう言ってたけど？あー分かる分かる。そっちで聞こえてたってことでしょ？まあ誤解しやすい言い方はしちゃってたよね。そういった意味では私も悪かったよね、うん。そういった意味ではこっちにも非があるわ…そういった意味では」

助演出「すごいそういった意味ではって言うこの人ー！でも、自分の勘違いでやしたか」

ク演出「まあ勘違いは誰にでもあるからね。それで坂部さん。次の会話、3人が『求められる』ことについて話しているところは、」

作者「ええ。お察しの通りあそこは、自分達3人の中で一番の人気者は誰だろうねーとい

うことを競い合っている、単純に」

ク演出「…単純にそうですよねー？ねえ？誰がね、一番人気者なんだろうねーってねえ」

助演出「え？いや演出殿、」

ク演出「あーはいはい！ねえ、うんやっぱりかー。うんそっちにねえ、聞こえちゃった感じかあ。(作者へ) いやー私の伝達力のなさが問題となっていますねーうん…そういう意味では」

助演出「出た！そういった意味では！」

作者「大丈夫ですか？」

ク演出「大丈夫ですとも！そろそろ…合ってほしいけど」

作者「え？」

ク演出「え？いえいえそれで、そこにほら、3人のところに4人目がやってきましたよね？」

作者「ええ。その4人目は、3人にとって予想してない存在だった」

ク演出「え？そうですよね！自分でも予想してないやつだったんですよー」

作者「まさに、異質と言えよう」

ク演出「そうですね！そういった意味では、異質！」

作者「その存在と相容れることは決してできない」

ク演出「決してできない！」

作者「しかし外の世界は新しい存在を創り出そうとしている」

ク演出「そういった意味では、そもそも今ある自我も、（作者、頷く）異なる自我と、（作者、

頷く）自我が混ざり合い、（作者、頷く）生まれた自我、そういうことですね？」

作者「そういうこと、ではない」

ク演出「ではない！最後の最後で！違う！今のは違うぞ鈴木！もう無理か？もう無理なのか？」

助演出「今の会話…演出殿はそういった意味ではって2回言ってやした！」

ク演出「またそれかい！」

助演出「すいやせん！そっちに気をとられて、話の内容は聞いてやせんでした！」

ク演出「…よくやった！」

助演出「さつきからすいやせん！でも最後の解釈はバッチリ暗記する勢いで覚えてやすん
で自分から言わせてくださいませ！」

ク演出「え？」

助演出「混ざり合うことは今ある自我が消えてしまうことも意味する。しかし新しい自我の
形成は、新しい自分が生まれる喜ばしいこと。そう、悲劇ではない、喜劇なのだ、
と。さつき演出殿はこう言ってやしたよね？ね！？」

ク演出「いや…こいつはねえ、まったく…ねえ？いやもう、はははは！」

ク演出、しばらく1人でごまかし続けている（自由に）。助演出と作者はじつと
動かない。ある程度ごまかした後、←の台詞へ。

ク演出「坂部さん、良いですよ！最後の私の解釈、全然違うなら全然違うって言ってくださ

いよ！覚悟は、できてます」

作者「全然違う」

ク演出「あああ…！（崩れ落ちる）分かってたけどお…！全部違うのは流石にショックだあ
…！」

作者「あなたもしかして、この作品を理解できていない？良いですか、最後の意味は…」

ク演出「あのその前にちょっと、1つ確認したいのですが…この作品のテーマってなんです
か？」

作者「この作品のテーマは…」

ク演出「人間の、奥ぶかい…」

作者「ドリンクバーだ」

ク演出「ドリンクバー。…ドリンクバー!？」

作者「そう、ドリンクバーだ。まさか…知らない？」

ク演出「いや存じてはいますけどドリンクバー…」

作者「この台本は、もしドリンクバーの飲み物達が機械の中で仲良くお喋りをしていたら
どんな内容になるんだろうな?と考え、書いたものだ」

ク演出「発想が可愛いな!」

作者「そして登場人物は、ウーロン茶、カルピス、コーラ、コーヒーとなっている」

ク演出「ウーロン茶、カルピス、コーラ、コーヒー!？何それまるでドリンクバーじゃん!
ドリンクバーでした!」

作者「(、黒を指して) 彼がコーラだ」

ク演出「そういえばお前ずつと黒いとか甘いとか言ってたな!泡が止まらないって炭酸の
ことかおい!それじゃあこいつ(、白) がカルピスかな?白いつて言ってたし!」

作者「その通り。ようやく理解してきたな」

助演出「ふー! (ク演出を称賛する感じで)」

ク演出「いやその情報頂ければ誰でも分かりますよ?」

作者「そして、ドリンクバーのアイス組の中で一番人気なのは誰だろうねーと会話をし
ている3ドリンクの元に、ホットコーヒーが現れるのだ」

助演出「あれ?でもなんでホットとアイスが同じ場所にいるんでやすか?」

作者「ある場合にのみ彼らは出会うことができる。彼らはなんとやっている?」

助演出「混ざり合う…?まさか…!」

作者「そう。その場合とは、子供のイタズラで飲み物が混ぜられる時だ!」

助演出「ギャー! コーヒーまで混ぜるとは何たる悪行!」

ク演出「確かに子供の頃したことあるけど」

助演出「もしや…コーヒーはいつもミルクとか砂糖と混ぜられているから、1人だけ混ぜら
れることに余裕があつたんでやすね!」

作者「私は勘違いをしていたようだ…あなた(助演出) がここの演出だったか」

助演出「…へい!」

ク演出「いや嘘は駄目だろ」

作者「そして最後。ウーロン茶が混ざり合った自分達を受け入れて欲しいと願っていたが」

助演出「そんな4つも混ざり合った物は絶対クソマズイでやすから…!」

作者「子供たちは飲まずにそれを捨てるだろう…!」

助演出・作者「世界は残酷だー!」

ク演出「皆、飲み物を粗末にしちゃあいけないよ、はい!えっと、それじゃあ結局このお話
は…ドリンクバーの飲み物達が1つのコップで混ぜられる子供のイタズラを嘆い
たものだと、そういうことですか?」

作者「ええ、その通り」

ク演出「：鈴木。この台本の最後の台詞を言ってみろ」
助演出「へい！そう、これは悲劇ではない：喜劇なのだ！」
ク演出「その通りでございやす！」

暗転。

【終】

「タイムリープ対決」

【登場人物】

悪の組織幹部

戦闘員／ボス

ヒーローマン

バズーカ男（田所さん）

女性

悪の博士

正義の博士

謎の博士

舞台は市街地。悪の組織幹部と戦闘員が一般の女性を襲っている。
明転。

戦闘員 「いー！いー！」

女性 「キヤー！誰か助けてー！」

幹部 「ふっふっふ…！もうこの町は悪の組織、三角団のもの。泣き叫んでも無駄だ」

戦闘員 「いー！いー！」

女性 「キヤー！誰かー！誰かー！誰かああああ…！！！」

幹部 「やかましいな女！別にお前自身をどうこうする気はない」

女性 「じゃあ帰って良いですか？」

幹部 「切り替えが早いな女！駄目だ。お前は人質だ。やつをおびき出すためのな」

女性 「帰って〜」

ヒーロー（声） 「そこまでだ怪人どもー！」

ヒーロー、下手から出てくる。

女性 「ヒーローマン！」

ヒーロー 「三角団の幹部、ダークン！お前を倒しにきたぞー！」

幹部 「まんまと現れたな、最近組織を荒らしているヒーロー！倒されるのはお前の方だ！」

戦闘員、前に出て強そうな型とか見せるが、服から『頑張れ』と書かれた紙（布）を取り出し後ろに下がる。

女性 「戦わないのかいこいつ！」

幹部 「いつものことだ」

ヒーロー 「いくぞダークン！ヒーロー奥義！ヒーローチャージャージ…！（右手をブンブン振り回し、幹部に近づく）パンチ！（左手で幹部を殴る）」

幹部 「ぐわあああ…！！！」

幹部、後ろに吹っ飛び、戦闘員に当たる。戦闘員そのまま上手へはけ、幹部は倒れる。

女性 「あ、そっちの手で攻撃するんだ！」

ヒーロー 「正義は勝つ！では私はこれにて！」

女性 「ありがとうヒーローマン！私も早く帰らないと！」

ヒーローと女性、下手からはける。

間

上手から悪の博士が出てくる。

悪の博士「フオッフオッフオ…負けてしまったようじゃな、ダークンよ」

幹部「あなたは…悪の組織で研究をしている、アクーノ博士…!」

悪の博士「そんなお主にワシが完成させた最高の発明品をやろう(懐からスイッチを取り出す)」

幹部「なんだそれは…?」

悪の博士「これは『タイムリープスイッチ』。このスイッチを押せば、数分前の世界に戻ることができるのじゃよ」

幹部「それはすごい発明品ではないか!」

悪の博士「しかし勿論リスクもある」

幹部「何?まあタイムリープできるんだ…リスクは当然か」

悪の博士「この発明品は一度使う度に、全身にダメージを受けてしまう…お主のボスが」

幹部「あ、ボスが!?俺じゃなくてボスが?まあヒーローを倒すためだ、すみませんボス」

悪の博士「ではお主にこの発明品を授けよう(幹部にスイッチを渡す)」

幹部「ヒーローマンよ…!次は必ず倒す!」

幹部、スイッチを押す。効果音と弱明。戦闘員と女性が出てきて、悪の博士ははける。

明転。舞台が冒頭に戻っている。

幹部「え?あれ?ここは…?」

戦闘員「いー!いー!」

女性「キヤー!誰かー!誰かー!誰かああああ…!」

幹部「やかましいな女!別にお前自身をどうこうする気はない」

女性「じゃあ帰って良いですか?」

幹部「デジャブ…!まさか本当に…数分前に戻っているのか…!?」

女性「ねえねえー帰って良いのー?」

幹部「ということとは…!」

ヒーロー(声)「そこまでだ怪人ども!」

ヒーロー、下手から出てくる。

女性「ヒーローマン！」

幹部「(嬉しそうに) おおーヒーローマン！よく来たなー！ええ？よく来たなー！」

ヒーロー「なんでちよっと嬉しそうなんだ？」

女性「キモ」

幹部「キモくない！もうお前なんぞに負けるかヒーローマン…！」

戦闘員、前に出て強そうな型を見せようとするが幹部に止められる。

幹部「あ、ごめん、今日はもうそれしなくて良いや」

戦闘員「いー…(残念そうに後ろへ下がる)」

ヒーロー「いくぞダークン！ヒーロー奥義！ヒーローチャージ…！！(右手をブンブン振り回し、幹部に近づく)」

幹部「オラー！（ヒーローを殴る）」

ヒーロー「ぐわあああ…！！(倒れる)」

女性「ヒーローマン…！」

ヒーロー「くっ…！技を溜めている時に攻撃するとは…この卑怯者…！」

幹部「いやその技もだまし討ちみたいでけっこう卑怯だからな！しかしこれでヒーローマンに勝ったぞ…！」

女性「じゃあ私も帰るわね(下手へ移動し始める)」

幹部「だから切り替えが早いな女。家に帰った過ぎだろ。…俺も報告のために一旦帰るか」

幹部と戦闘員は上手から、女性は下手からはける。

間

下手から正義の博士が出てくる。

正義博士「フオッフオッフオ…負けてしまったようじゃな、ヒーローマン」

ヒーロー「あなたは…政府で研究をしている、セイギー博士…！」

正義博士「そんなお主に最高の発明品をやろう(懐からスイッチを取り出す)」

ヒーロー「それは…？」

正義博士「これは『じかんもどろる』。これを使えば数分前の世界に戻ることができるのじやよ」

ヒーロー「なんてすごい発明品なんだ！」

正義博士「しかし勿論リスクもある」

ヒーロー「何？」

正義博士「この発明品を使うと…その月のお主のスマホが通信制限になってしまう」

ヒーロー「何そのリスク？通信制限？地味に嫌だけど…仕方ない。これも悪を倒すためだ！

(スイッチを押す) ダークンよ…！次は必ず倒す！」

効果音と弱明。幹部・戦闘員・女性が出てきて、正義博士ははける。

明転。舞台が冒頭の少し後に戻っている。

ヒーロー「うん？ここは…？」

女性「ヒーローマン！」

幹部「嬉しそうに) おおーヒーローマン！よく来たなー！ええ？よく来たなー！」

ヒーロー「嬉しそうに) ダークンがいる！ということは本当に戻ったのか！よっしゃ！お前を、倒す！」

女性「なんでこの2人嬉しそうなの？キモ」

ヒーロー・幹部「キモくない！」

ヒーロー「早速いくぞダークン！ヒーロー奥義！ヒーローチャージャージ…！(右手をブンブン振り回し、幹部に近づく)」

幹部「オラー！(ヒーローを殴る)」

ヒーロー、幹部の攻撃を避ける。

幹部「何！？」

ヒーロー「やはりここで攻撃してきたか…！ならばこれならどうだ！ヒーロー超奥義！ヒーローエネルギー…！(両手でエネルギー弾を撃つ構えをとる) 派…！…！…！」

幹部、前に防御する。上手側からバズーカを持った男が現れ、後ろから幹部を撃つ。

幹部「ぐわああああ…！！(後ろを向き) 誰だあいつは…！！(倒れる)」

ヒーロー「田所さんだ。正義は勝っつ！」

女性「私も帰るー！」

ヒーロー、女性、田所さん、下手からはける。

間

上手から悪の博士が出てくる。

悪の博士「フオッフオッフオ…負けてしまったようじゃな、ダークンよ」

幹部「きたなアクーノ博士…！」

悪の博士「そんなお主にワシが完成、」

幹部、悪の博士の懐から無理やりスイッチを取ろうとする。

悪の博士「いやん、ちょっと、何？…お主、もはやそっちの気が？」

幹部「違うわ！（スイッチを取り、押す）おらー！」

悪の博士「あー！（早口で）この発明品は押せば数分前の世界に戻れるがリスクとして全身にダメージを受けてしまうお主のボスがー！」

幹部「次こそは…勝つ！」

効果音と弱明。ヒーロー・戦闘員・女性が出てきて、悪の博士ははける。
明転。舞台が冒頭の少し後に戻っている。

幹部「また舞い戻ったぜ…！ヒーローマンよお…！」

ヒーロー「（嬉しそうに）ダークンがいる！ということは本当に戻ったのか！よっしゃ！お前を、倒す！」

幹部「御託は良い…さっさと始めようぜ」

ヒーロー「ならば早速いくぞダークン！ヒーロー奥義！ヒーローチャージャー…！（右手をブンブン振り回し、幹部に近づく）」

幹部「オラー！（ヒーローを殴る）」

ヒーロー、幹部の攻撃を避ける。

ヒーロー「やはりここで攻撃してきたか…！ならばこれならどうだ！ヒーロー超奥義！ヒーローエネルギー…！（両手でエネルギー弾を撃つ構えをとる）派…！…！！！」

上手側からバズーカを持った男が現れる。

幹部「オラー！（男に膝蹴りをする）」

男「ぎゃあああ…！！！」

男、上手へはける。

うどバスが発する時間じゃない！最悪ー！次のバス30分以上後だし、絶対遅刻しちゃうじゃないのー！コロッケのディナーショー！美川憲一のモノマネ見たいのにー！もー！こんな変な戦いに巻き込まれたからだ！最悪！

真ん中から謎の博士が出てくる。

謎の博士「フォッフオッフオ：お困りのようじゃな、お姉さん」

女性「あなたは：近所で怪しい研究をしている、ヤバイババア：！」

謎の博士「そんなお主に最高の発明品をやるうぞ（後ろからおかきを出す）」

女性「それは：？」

謎の博士『おかき』。食べれば数分前の世界に戻ることができるのじゃよ」

女性「えー！？何そのおかき！すごい！」

謎の博士「しかし勿論リスクもある。これを食べれば、戻った先にいる人間達が皆：人見知りになってしまうのじゃ」

女性「人見知りに？なんで？でもまあ：私じゃないし良いか（おかきを食べる）。よし！なんとか時間を食わないようにあの戦いを終わらせるわよ！」

効果音と弱明。幹部・ヒーロー・戦闘員が出てきて、謎博士ははける。

明転。舞台が冒頭の少し後に戻っている。

女性「ここは：？あ！ヒーローマンがいる！本当に戻ってる！」

ヒーロー「：あ、そうです、私は一応あの：ヒーローマン、です」

幹部「会いたかったぞ、です、ヒーローマン、さん。あー緊張する…」

女性「確かに2人とも人見知りになってる：！キモ」

ヒーロー「あ、ダークン！：さんがいる：！ということは本当に戻ったのか！」

女性「えっと：私がまず初めにやることは：」

ヒーロー「では、あの、早速いきますよ、ダークン！さん！」

女性「オラー！（戦闘員を攻撃する）」

ヒーロー・幹部「えー！？」

女性、戦闘員をボコボコにする。

女性「後にお前のせいで戦闘が長引くんだよ！お前の体がダメージだらけなのは分かっただよ！それなら不意打ちすれば弱い私でも倒せるんだよ！」

幹部「やめるー！なぜそんな執拗に戦闘員をボコボコにするー！やっぱり他人はコエー！」

ヒーロー「どの辺が弱いんだ…」

戦闘員、上手へはける。

女性「さあ。それじゃあさっさと、やり合いなさい」

ヒーロー「なんか知らない流れになってる…」

幹部「どういうことなの…」

ヒーロー「えつとあの…じゃあ、ヒーロー超奥義！ヒーローエネルギー…！！（両手でエネルギー弾を撃つ構えをとる）派…！！！！」

上手側からバズーカを持った男が現れる。幹部、男を攻撃しようと上手側を向くが止まる。

幹部「あ、あの初めまして、ダークンと言います、はい」

男「え？あ、あの、自分田所です、はい、え？」

女性「あいつも人見知りにな？ここに出てくる人全員かー」

幹部と男、ぐだぐだしている。ヒーロー、男の方を向いている幹部を攻撃しようと近づく。しかし男、緊張でバズーカを撃ってしまい逃げるように上手側からはける。

ヒーロー・幹部「ぐわああああ！！！！（倒れる）」

女性「…終わったの？」

ヒーロー「まだだ…！まだ終わらんよ…！！」

幹部「俺だって…！！」

ヒーローと幹部、頑張つて起き上がるが、女性、2人の首元に手刀を入れる。2人、倒れる。

女性「…良い戦いだったぞ。（腕時計を見る）ギリギリ間に合ったー！帰ろー！」

女性、走つて下手からはける。上手から悪の博士、下手から正義の博士が現れる。

悪の博士・正義博士「フォッフォッフォ…あ（互いの存在に気付く）」

悪の博士「あの、あ、その、私は、」

正義博士「あ、いや、私はですねその、」。

悪の博士 「なんか人見知りですみません…」
正義博士 「いや私も…」

2人、はける。徐々に暗転していく。

【終】